

### 5 - 3 幌呂川地区湿原再生

#### (1) 調査地の概要

- ・ 広大な釧路湿原のなかで、西側台地の縁辺部に位置する。
- ・ 湿原部は農地に改変されたが、未利用農地となっている部分もある。
- ・ 耕作放棄された後、低地側にヨシやハンノキが侵入してきている。
- ・ 周辺の湿原は、ハンノキ林が増加しており、南側には、高層湿原や赤沼、池塘といった貴重な湿原環境が分布している。

#### (2) 自然再生の目指す方向

- ・ 台地から湿原へと植生が移行していた以前の形態に近づける。
- ・ 地下水、表流水など良好な水環境の回復を図る。

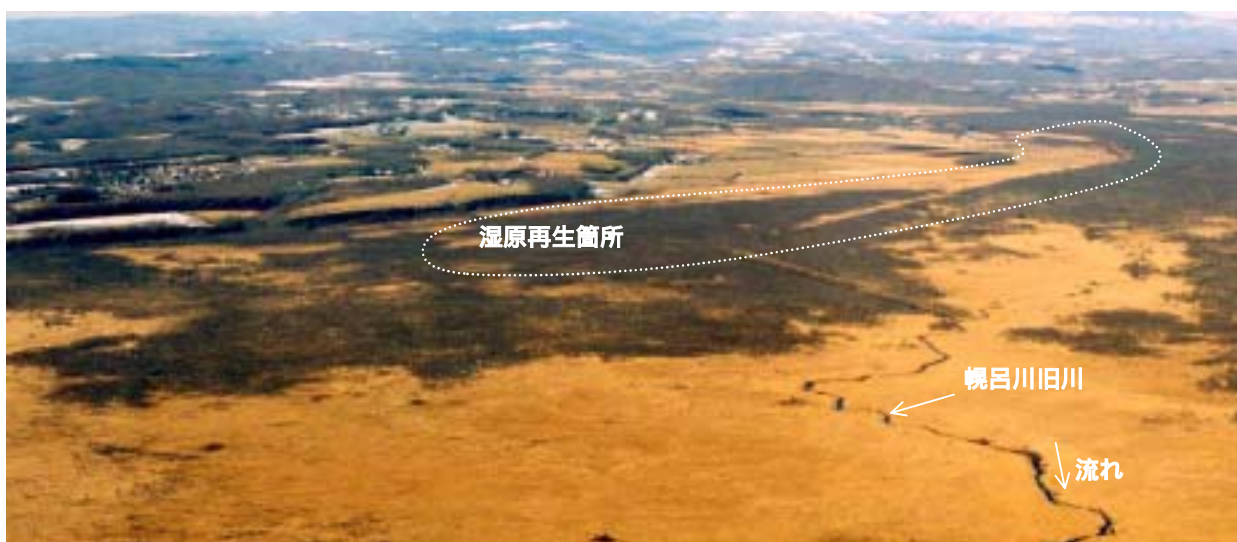
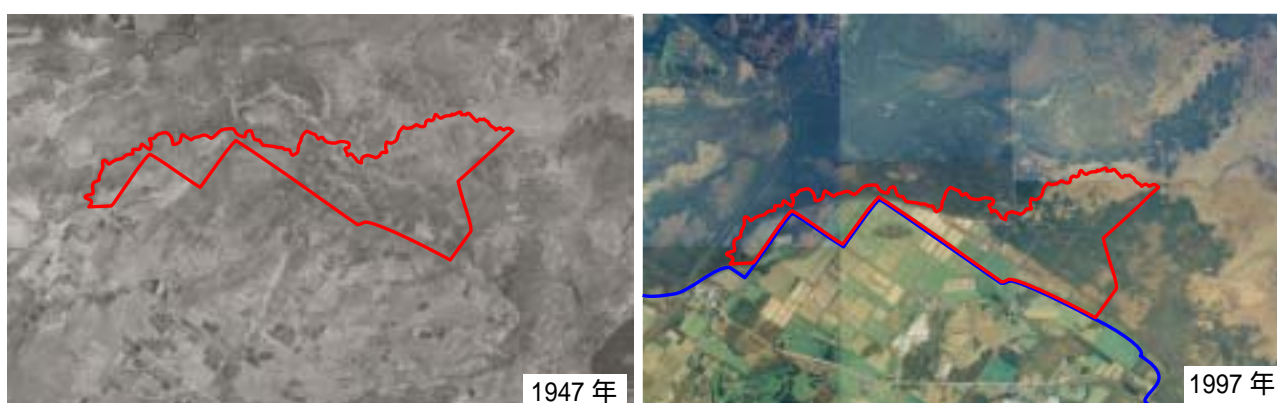


図 5-3-1 幌呂川地区の現況



凡 例	
— (blue line) —	河 川 区 域
— (red line) —	湿 原 再 生 箇 所

図 5-3-2 幌呂川地区周辺の航空写真

### (3) 社会環境・自然環境の変遷

#### 1) 社会環境の変遷

鶴居村の基幹産業は酪農主体の農業であり、雪裡川及び幌呂川の流域では、国営農地改良事業により、草地と排水路が整備された。台地部や河川沿いで牧場や牧草地による土地利用が進み、森林や湿原域からこれらに置き代わってきている。

#### 2) 自然環境の変遷

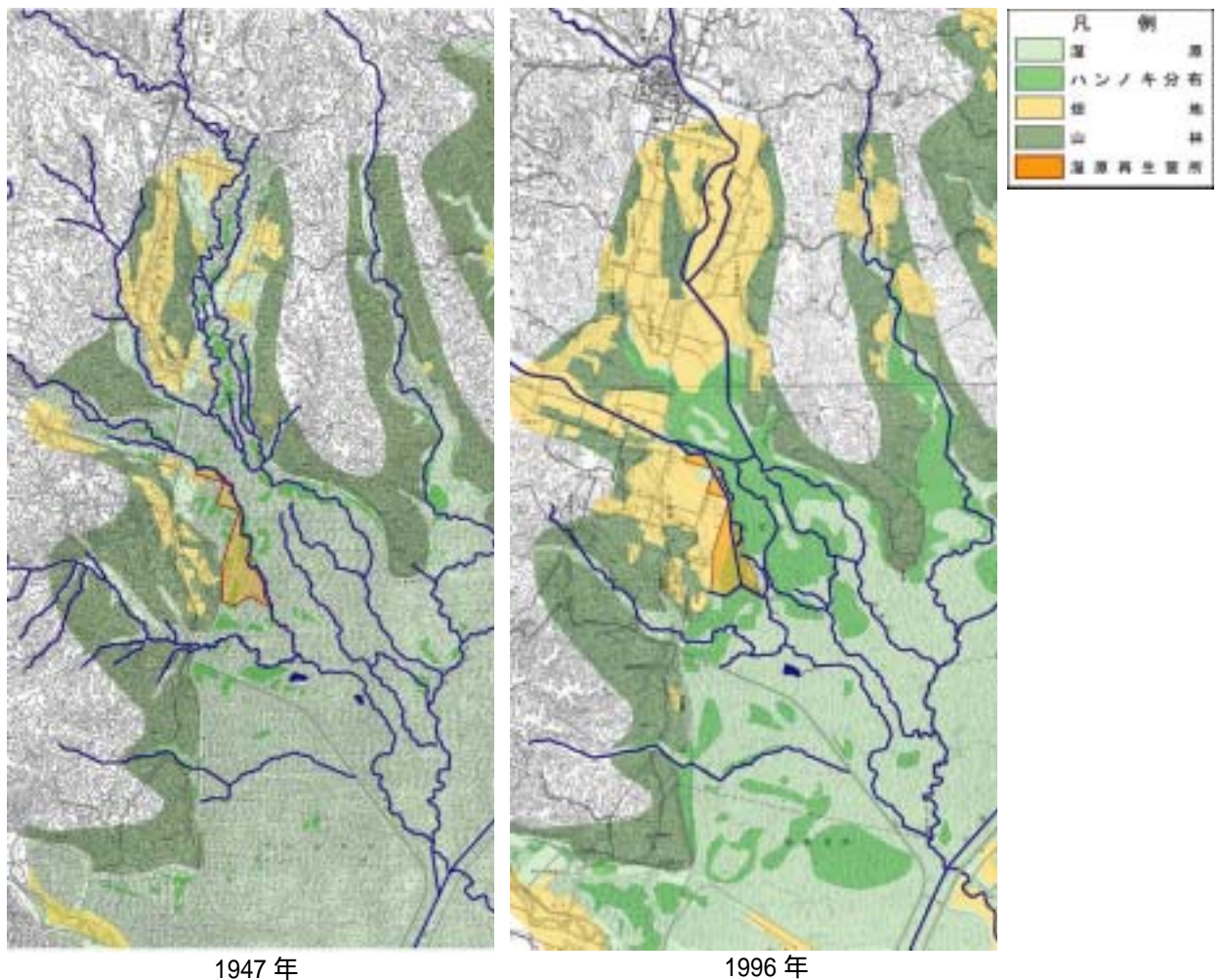
##### 河川の変遷

鶴居村幌呂地区の市街周辺より下流は、直線的な河道で、雪裡川と合流するよう改修されている。これにより、河道内の流下能力が向上し、下流への土砂移動が増し、下流の合流点周辺では、上流から運搬されてきた土砂が河道内に堆積している。

雪裡川合流点より下流の未改修河道は、流下能力が不足し、不規則蛇行を形成している。不規則蛇行が発生した直後に分岐流路を持つ。

##### 植生の変遷

1947年と1996年を比較すると、ハンノキ林と畑地の面積が急激に増加していることがわかる。特に旧幌呂川沿いで農地開発が著しく、湿原域が農地へと転換されている。また、幌呂川、雪裡川沿いの直線化された河道周辺とその下流ではハンノキ林が増加している。



1947年

1996年

図 5-3-3 幌呂川地区の湿原及び周辺の状況



池塘の変遷

赤沼周辺の池塘数は1967年から1997年までの30年間で減少している。また、1967年から1977年の間に赤沼までの木道が変わっており、その周辺の池塘が消失している。

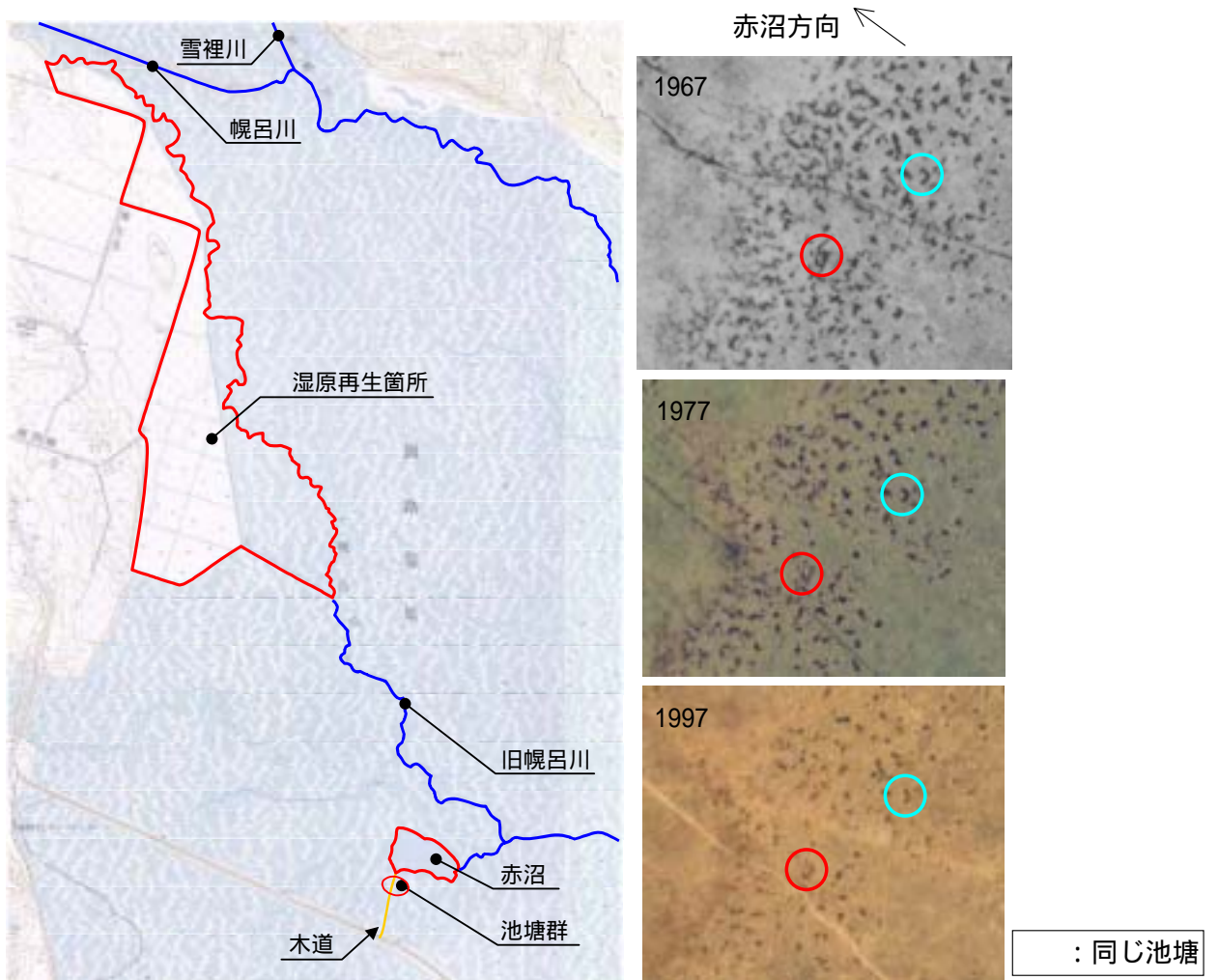


図 5-3-4 赤沼付近の池塘の状況

(4) 本年度の調査項目

本年度の調査項目は表 5-3-1 のとおりである。

表 5-3-1 幌呂川地区における本年度の調査項目

区分	調査項目	調査内容
生物調査	植生調査	代表的な箇所では植生調査を行い、植物相を把握する。
	ハンノキ林調査	ハンノキが林分を形成している場所に5箇所(10m×10m)の調査地を設け、胸高直径、樹高および萌芽数を記録する。
	埋土種子調査	50cm、100cm、150cm、200cmの深さから土壌をサンプリングし、発芽時の水環境を2通り設け、各土壌から発芽した種を記録する。
立地環境調査	周辺状況調査	既往資料を用いて、自然環境および社会環境について整理する。
	地下水位調査	10箇所の地下水位観測孔を掘削し、地下水位を計測する。
	簡易土壌調査	調査区全域においてピートサンプラーを用いて簡便な土壌調査を行う。

(5) 調査の年次計画

幌呂川地区での調査の年次計画を表 5-3-2 に示す。

表 5-3-2 湿原再生のスケジュール(幌呂川地区)

実施項目	概要	H14	H15	H16~	備考
河道特性調査	・旧河道・現河道縦横断測量 ・旧河道河床材料調査 ・河川水位・流量観測		→		旧川復元に関連
環境調査	・動植物調査 ・水質・底質調査 ・気象調査		→		
地下水調査	・地下水位調査	→			
周辺農地・湿原への影響検討	・水位・地下水位・環境の変化予測			→	
高層湿原への影響把握	・赤沼水位観測 ・赤沼動植物調査			→	幌呂川下流に位置する高層湿原への影響を把握するため、赤沼周辺の環境調査を実施する。
復元工事	・施工計画 ・試験施工			→	旧川復元に関連
堀込等による湿原再生	・動植物調査	→			事業による植物の分布状況を予測・検証するため、事前、事後調査を実施する。
	・再生方法の検討			→	